

「苑」この人に会いたい
帯津三敬病院・名誉院長
医学博士
帯津良一さん(75歳)

帯津良一



「癌は体だけの病気ではない。
だから部分だけでなく、
心や命にも目を向けて
人間をまるごと捉える医療が
必要なんです」



西洋医学に中国医学をはじめとする代
替療法を取り入れ、医療の東西統合と
いう新機軸を作った第一人者。人を安
心させる温かいオーラを放ちながら、
今も現役で癌患者の治療にあたる、
帯津良一さんに迫った。

西洋医学に感じた限界が転機に

”ホリスティック医学“という言葉聞いたことがあるだろうか。ホリスティックとはギリシア語の「holos」が語源で、「全体的」という意味を持つ。通常の病院で行われている医療はいわゆる西洋医学で、体の悪い部分のみを治療するが、“ホリスティック医学”は中国医学などさまざまな代替療法を取り入れ、人間を総合的に捉えた治療を行う。その第一

人者であり、帯津三敬病院の名誉院長と日本ホリスティック医学協会の会長を兼任するのが帯津良一さんである。今、ホリスティック医学が求められている背景とは何なのだろうか。

「医者になりたての時、都立駒込病院で食道癌の外科医をやっていた、西洋医学の限界を感じたんですね。今はそうでもないですが、当時の食道癌は一番難しく大変な手術でした。何時間もかかる、出血はする、術後の合併症が次々と起こっ

て命を失う。それは悲惨な手術でした。駒込病院が東京都の癌センターとして再出発した頃は、徐々に食道癌の手術がスムーズにできるようになって、意気軒昂と取り組んでいたんです。でも、再発率が以前とほとんど変わらないんですよ。手術がガタガタの悲惨な時代とスマートな手術ができる時代の再発率が変わらないのは、進歩が結果に反映されていないわけで、西洋医学の構造的な限界があるんだろうなと思ったんです。



外科医1年生（1962年）の頃 後方真ん中が帯津先生



西洋医学は部分を見ることには非常に長けているけど、やっぱり命とか人間まるごとというのは部分の集合体ではなく、部分と部分との間にある目に見えないつながりで全体を成しているんですよね。部分だけを見る西洋医学では全体を見落とすから、そのつながりになる医学を合わせないといけないと思った。そこで中国医学に目を向けたんですね。中国医学というのは陰陽学説と五行学説が基

本になっていて、両方ともつながりを見る哲学なんです。そこで中国へ行って中国医学を勉強してきて、駒込病院で少し手がけはじめたんですね。でも当時の患者さんは高度先進医療を求めている、モーターの音がして切られるとか管だらけになるとか、そういうのがいい医学だと思っていたんです。だからそんなことをやっても誰もついてきてくれませんでした（笑）。

ホリスティック医学との出会い

大集団の中では自分の求める医療ができないと考え、1982年に「帯津三敬病院」を設立。3階建てのこぢんまりした建物でスタートし、孤軍奮闘する異色の医師として雑誌で取り上げられたこともある。2年前に創立した現在の建物は11科を擁する大病院で、さまざまな代替療法を取り入れながら、大勢のスタッフとともに患者の治療にあたっている。

「中国ではアヘン戦争の頃から伝わる古い考えで、中国医学を合わせた“中西医结合”という言葉があるんです。それをこの病院で始めたんですけど、そこへアメリカからホリスティック医学の“人間まるごとつかまえる”という考えが入ってきて、だんだんホリスティック医学へ移行してきたんですね。今でも中国医学は

始めた頃のまま、漢方薬、鍼灸、気功、食養生をやっている、うちの病院ではこの4つがホリスティック医学の基本になっています。

要するに、癌は体だけではなく、心とか命にも深く関わる病気なんです。体だけに注目する西洋医学だけで治療したら駒不足は否めないし、心とか命にも目を向ける戦略を作らないといけない。私の戦略は20数年前から同じで、家を作る時の構造と似ています。土台が心、1階が食事と気功、その上に西洋医学や漢方薬、鍼灸などが乗るんですね。だから基礎で



「なぜ「粗食」が体にいいのか」(東洋経済新報社) 帯津良一・幕内秀夫著。945円。名医と管理栄養士が教える、食生活のヒントが満載

「生死問答 平成の養生訓」(平凡社) 五木寛之・帯津良一著。735円。作家と名医が死のビジョンを語る、生きる勇気と死ぬ元気がでる本



病院内道場



ある土台を、気の養生、食の養生といった養生法で締めるわけです。そこをしっかりと押さえた上で、西洋医学で何ができるか、漢方薬は使った方がいいか、鍼灸はどうするかなどを考えて、最適な戦略を遂行していく。だから戦略は患者さんごとに違うし、毎日戦略を立てる作業をやっていますね。患者さんの部屋も朝行く順番が決まっています、一人一人30分ぐらい話をして帰ってくるんです。

戦略会議をやるためには、西洋医学以外のいわゆる代替療法に通じていないとできないので、他の先生では無理なんです。だから病棟の受け持ちは、私と西洋医学の医師のダブルで持っています。

スタッフはみんな対等な立場で、医療という現場の当事者のひとりだと思っんですね。この際は看護師だとか心理療法士だとか、主役はほとんど交代するものだから、自分は脇役に徹すればいい。また医師が主役の時もありますから。そういう流動的な考えになればいい。そんなふう

前向きにできていない
”人間の本性“

以前NHKの番組で氣功を教えていたほどの腕と知識を持つ帯津さん。氣功をはじめとする代替療法は、ホリスティック医学に欠かせない。代替療法に通じることで、人間の本性が見えてきたという。

「外科医は手術で治すわけだから、人の心に目を向けませんよ。ところが中国医学をやると、処方するのも氣功を教えるのも人の顔を見るのが勝負になる。顔ばかり見ていると、心の中が少し見えてくるんです。心の状態と病状の推移に深い関係があることがわかってきたんですね。だから病気を良くする心の状態をみんなでサポートしていくのが、医療として大事ではないかと思っています。」

20年以上前から心理療法のチームを

作ってるんですが、見ていたら「やっぱり人間は明るく前向きにできてないな」と思ったんですね。そう思って観察していくと、明るく前向きな人というのは魅力的な人があまりいないですね。鈍いんですよ、本質がわからないから。藤原新也さん（作家・写真家）も書いてるんですよ、「明るく前向きな奴に氣をつけろ」ってね。だから患者さんにも言うんです。人間は明るく前向きにはできてない、それが人間の性なんだって。人間の性、本性は何だって考えて、本を読んだり人間を観察して到達したのが「悲しみ」なんです。だからあなたも悲しい、私も悲しい。悲しみの中で希望を抱いて、それが達成されると心がときめく。そうやって人間は生きていくんだってね。悲しみとか寂しさはそういうものだと思って、そこから出発しようって言うてるんです。

一昨年の暮れにある大学で講演があった、悲しみの話をしたんです。そこで東大の哲学教授の竹内整一さんに会って、「私いま悲しみが題材の本を書いてるんです。もうじき出るから先生の話をに入れてもいいですか」と言われて、どうぞと言ったんですね。本が送られてきて、タイトルは『「かなしみ」の哲学』。読んでみると、西田幾多郎、国木田独步、西脇順三郎：といった錚々たる人生の先輩がみんな「人間の本性は悲しみだ」と言っているんで

すね。私が気付いたことは間違いないんだって思いました」

「死」に対して

目を開くことが大切

「今、病院では年間百人ぐらいの患者さんが亡くなっています。だいたい三日に一人でしょう。特に昔は私ともう一人の二人だけで奮闘してましたから、単純計算しても一人が50人の死を見るわけですよ。それで、死にゆくことや死後の世界について考えるようになったんです。患者さんは、死にたくなくて病院に来るわけですよ。だから死に対して目を開かないと、向き合えないんです。

ここ20年ぐらい、金曜日の夕方は病院の道場に患者さんを集めて講話会をやっているんですが、そこで死の話を切々とするんです。死後の世界は必ずある、と。だけど調べようがないから議論しても始まらないし、私はあると思ってる。だから命のエネルギーを日々高め続けて、最後の死ぬ時を最高に持っていくわけですね。最後を最高にとって加速していく。だからすごい勢いで死の壁を突破して、死後の世界へ飛び込めって言うんです。すると向こうの世界の人が「なんだ今のは」ってびっくりする。

私の楽しみはね、先に逝った飲み仲間





がいつぱい待つてることなんです。だから逝ったらすぐ酒盛りですよ（笑）。だから、死はスペースシャトルに乗り込む時の気持ちだって患者さんに言うんです。楽しみなんですよ、宇宙に出ていくのが。失敗するかもしれないし多少の不安はあるけど、ワクワクする気持ちで新しい展開を楽しみにしてほしいって思ってるんですね。

小説家の田口ランディさんが私の本の冒頭で、「死をタブー視しないで医療の中でもっと語ってもいいんじゃないか、死生観を持たない医者にみてもらうことほど怖いことはない」って書いてますけど、本当にその通りだと思います。死生観を

持たなくては、人の死なんか扱えないですよ。だから医療者たるものは、必ず死のぎりぎりの所へ行かないと。王貞治さんが胃癌の手術を受ける前に記者会見したのを見たけど、記者に「手術に不安はないか」って聞かれて「私は今日が最後だと思って生きてるから、明日手術で死んでもかまわない」と言っていて、やはり一角の人だ（ひとかた）なと思いましたね。死ぎりぎりのところで生きるというのは、いつも今日が最後だと思って生きることなんです。私は毎日お酒を飲むんですが、いつも最後の晩酌だと思って飲むんですよ。これは欠かせないし、すべてを忘れるストレス解消法でもあるんです」

その人柄を慕って患者たちが集う

帯津さんは東大医学部卒で長年に渡り医学界をリードする、いわば真のエリート。だが、その人柄には権威の力ケラも漂っていない。患者にとつて病気を任せるだけでなく、心の拠り所ともいえるべき存在になっている。病院の道場で開かれる講話会や気功には毎回30人以上が集まり、そこには医師と患者の枠を超えて声をかけ合う和気あいあいとした空気がある。そんな帯津さんに、今後の目標を聞いてみた。

「目標はね、命のエネルギーを高め

続けていくこと。今やっているホリスティック医学の成就というのは、生と死が一体となって統合されることだと思うんですよ。統合とは、従容として死んでいくこと。私もそうなりたいと思うんですね。生きていううちに何かやらなければいけないと思うとプレッシャーになるから、この世でできないことはあの世でやればいいと高を括ったんです。だから楽なんですよ。

立川談志さんにどういう死に方をしたいか聞いたことがあるんだけど、「俺は癌とか心筋梗塞とかありふれた病氣じゃ死にたくないな」って言う。じゃあどういう病氣で死にたいのか聞いたら、「ふとした病氣で死にたい」って（笑）。私はなるべく死を視野の中に入れるというか、死を手繰り寄せて生きるのがいいと思うんですよ。私が死ぬのは谷中の居酒屋の前がいいんだけど、それを立川さんに言ったら面白かったですよ。「先生、それは入る前？出てきた後？」って。満ち足りて出てきた後よりこれからって手をかけた時がいいなと思って「入る前がいい」って言ったんだけど（笑）。人間はみんな死ぬんですからね。生と死の統合を胸に抱いて生きることが元気の源になっているし、やり残したことがあれば向こうでやればいいと思っています」